

デスゲーム漫画に転生  
したっぽい

石鹼棒どこ？

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

FITでスリーマンセルを組んで未開拓領域フィードに出ろ！

マテリアルを回収して開拓拠点フロンティアベースを発展させろ！

NA-ENGを集めてSCP-POWを生成しろ！

邪魔するTSはSCP-POWで撃破して生体マテリアルを入手しろ！

巨大なTSにはSSに乗り込んで応戦だ！

※FIT チーム編成理論及びSCP-POWの運用技術

※NA-ENG 開拓惑星に存在するキラキラした気体エネルギー

※SCP-POW NA-ENGを生命体に取り込むことで生み出せる万能エネルギー

ギー

※TS 体温を持たない原生生物

※SS SC|POWの生成効率を上げる装備を巨大化した二足歩行兵器

そんな作品

沢山用語が出てきます

所謂〇〇と説明することがあるので詳細はそこまで覚える必要はないかもです

以下あらすじっぽいもの

架空原作漫画のデスゲーム内で目が覚めた主人公。

状況を整理して、死んだら死ぬことになるのは嫌なので、とりあえずこれは現実であり、転生でもしたんだろうと考えることにした。

プレイヤーは惑星開拓のための拠点に送られてきた訓練兵500人。既に開拓拠点を設置して何年も前からここで活動している上官には逆らえない。

拠点にいる人員の大半は技術者であるため、実際に拠点周りを探索するのは訓練兵の仕事だ。

食いつぶぐれないために、ゲームの中で勉強をして上官からの指示に従う生活が始まった。

# 目次

夢かもしれないけど転生って考えること にした	1
さっぱりと気持ちのいい主人公属性のや つ	7
バトルスーツはラバースーツでも全身タ イツでもなかった	14
好みの異性は？	22
こんなチームで大丈夫か？	29
VR訓練は人が死なない施設です	37
in to the VR	45

夢かもしれないけど転生って考えることにした

「そこのお前！」

大声に反応して意識が覚醒する。どうも、授業中は眠くなつて仕方がない。小学校六年間で染み付いてしまった習慣は体がデカくなつても抜けてくれないのだ。

何年か後には社会人だ。このままだと、上司が話してる間だったり、会議中に眠くなつたりしそうで心配だ。

「今俺が言ったことを復唱してみろ」

「は、はい。えーつと……」

どうやら、怒られたのは俺ではなかったらしい。人の

振り見て我が振り直せ。授業に集中するとしよう。

……今はなんの授業中だったっけ？ ダメだ。寝ぼけすぎてる。教科書類は……目の前にあるのは謎のハイテク机だけだ。ウチっていつからこんな近未来的になつたんだ？

そうだ。教師を見ればなんの時間かわかる。怒鳴る教師は時代の流れと共に消え去つたと聞いていたが、どうやら怒られた奴はよっぽど授業に集中していなかったよう

だ。まさか現代の教師が怒鳴るとは……。一体怒られたやつは何をしていたんだ？

「NA—ENGを回収することで活動時間が増加するので、作戦行動中はNA—ENGの溜まり場を発見する事も重要であり、ナビゲーターに最低限求められる技能が溜まり場のNA—ENG量の見極めと、回収コストリターンの計算である……。です？」

えぬえーえなじー？ 一体何を言ってるんだ。ゲームの話か？ 思わず生徒のほうに目が向いた。

流石に授業中にゲームをしていたら怒られるか。これは、教師も大激怒不可避だろうな。

……。というか、あんなやつウチにいたか？ 銀とピンクの中間色みたいな派手な髪をしたやつなんて見たことがないぞ。でも、どこか既視感がある。染髪をした目立たないやつという可能性？ 髪の色が変われば話したことがないやつなんて見たことの無い人へ早変わりだろうしな。

「ふん……。良いだろう」

良いだろう!! 近くの友人に小さく礼をしている知らないやつから教師に注目先を変える。……。眼帯をした教師なんかいたか？

こいつも妙な既視感がある。眼帯と付け髭で印象を変えて……。いや、教師がそんなことをするわけがないか。

誰なんだこの男は。

「NA—ENGを回収することで、お前らはSC—POWを生成出来る。これは、有害物質が至るところにある未開拓領域<sup>ファイナルド</sup>での活動に必須のものだ。SC—POW残量を監視するのはナビゲーターの役目とはいえ、お前らも常に自分のSC—POW残量には気を配っておけ」

えすしーぱわー？ ファイールド？ 教師が授業中にゲームの話？ いや……違う。俺は知っている。これは夢か？

「最低限のSC—POW運用——<sup>ファイット</sup>FIITが可能となつた者から未開拓領域<sup>ファイナルド</sup>探索任務を割り振ることになる。そこでポケットとしてお前、<sup>ファイット</sup>FIITは理解しているな？ 説明してみろ」

俺か!? <sup>ファイット</sup>隣のやつに脇腹を肘で小突かれた。やはり俺のようだ。<sup>ファイット</sup>FIIT確か——

「……<sup>ファイット</sup>FIITとはSC—POW運用方のひとつでありFire・Ice・Thunder三種の属性変化の事を指し、このうち一属性への変化が可能になつてSC—POW運用が出来ると言える基礎技術です」

「ポケットとしても本国で理論の勉強は済ませているようだな。だが、複数属性の運用が可能。というような説明ではダメだ。<sup>フロンティアベース</sup>開拓拠点を作つた第一陣からSC—POWに触れて戦つてきた奴でも複数属性を扱うことはない」

ふう……なんとかあったか。しかし、やはり知識通りだったか。だとすればやっぱり夢なのか？

NA—ENGやらSC—POWやら、それらの用語は俺が読んでいたコミックの中に登場するものだ。

断じて現実に存在するものではない。しかし、夢にしては意識がしつかりしすぎていて、現実感が強い。

「それから、F-I-Tはそのままスリーマンセル組み方としても扱われている。三属性バランスよく組むことで対応の幅が広がるからな」

確か俺は……何かに衝突した？ 降ってきた？

先程目が覚める前の事を思い出そうとするが、何かにぶつかったということ以外に思い出せることはない。

状況から考えるに、意識不明中に見ている夢か、あるいは転生ということだろう。夢であればどうなるかが問題はない。

仮に、事故で俺が死んで転生したとしたら第二の人生を兵士として生きることになる。

とても辛い。どうしてぬくぬく平和に生きていた俺が危険な未開拓領域フアイタルドに出る兵士になる必要があるのだ。しかも一兵卒であるため与えられた任務をただこなす他なく、



原作知識はほとんど活かさないだろう。

兵士として死の恐怖をどうにかする方法を学んだわけでもなく、一回死んだために（仮に転生なら死を経験しているはずである）死を恐れなくなっているわけでもない俺が兵士としてやっていけるのか不安だった。

ひとつ救いがあるとすれば、同期の兵士も、兵士として訓練を受けた訳でもない一般人であるということだ。

というのも、この世界、デスゲームもののVRMMO漫画が原作なのだ。

プレイヤーは5000人の兵士。この惑星を開拓するために、初めて本国から大規模な訓練兵が送り込まれるが、星間航行中に本国でクーデターが発生。帰ることが出来なくなったため予定通り開拓惑星で兵士として任務を受けて生きていくというのがゲームのオープンニングだ。

そこで70越えのジジイゲームマスターが現れ、「本国に帰れなくなったようにログアウト機能も切ったよ。頑張って生きてね。あと死んだら現実でも死ぬよ」と言っただけでゲームを開始するのだ。

状況から見ると、今は丁度デスゲーム宣言が終わって、NPC教官の授業を受けている場面。生活していくためには兵士として働かなければならないため、上官に逆らう事は出来ないのだ。

「本来はF-I-Tフイットの基礎だけではなく、更に訓練をしてから任務を回す予定だったが、お前らも知っているように本国で発生したクーデターによつて我らへの支援が打ちきられた。食料、電力の自給自足は出来ているが、いつ破綻するとも限らない。出来るだけ早く未開拓領域フィールドでマテリアルの採取を行えるエリアを開拓して資材の確保を行わなければならぬのだ」

本国から開拓途中のこの地では入手できない金属等を支援してもらふことで、基地を、装備を用意していたのが開拓拠点である。

それがなくなつたため、俺たちは機械が壊れたりする前にそれらを生産、修理できる素材を入手できるようにしなければならぬということだ。

ガチガチに訓練した後の活動ではないのは、プレイヤーとキャラクターの熟練度のすり合わせのためとか何とか。

本国にはN A | E N Gがないため、S C | P O W使用を前提としたこちらでの活動訓練はできないらしい。だから、新兵をいきなり活動させる必要があるんだな。

「準備が出来たようだ。早速、S C | P O Wの訓練を行う。それぞれ割り当てられた更衣室で装備を受け取り次第訓練室に集合しろ」

## さっぱりと気持ちのいい主人公属性のやつ

解散が宣言されてすぐに携帯端末を確認する。

俺たちは本国から開拓拠点に送られた兵士であると同時に、この惑星での生き方、戦い方を開拓拠点で学ぶ学生でもある。

所謂生徒手帳のようなそれには、俺の所属が書かれていた。

どうやら、俺は戦闘、探索を担当し実際に未開拓領域で活動する兵士のようなのだ。

そして、ゲーム的に、俺はNPCではなくプレイヤーである事も確定した。

開拓拠点にいる戦える人間は何もない惑星を切り開いたかつてのおっさんである老人と、その弟子であるかつての若者であるおっさんたちしかいないので、バリバリ働ける若者は本国からやって来た500人のプレイヤーだけなのだ。

プレイヤーと同じ船でやって来た学生にはナビゲーターもいなくはないのだが、こっちはNPC。出来ることなら俺もナビゲーターがよかったが、そうもいかないらしい。

「お、いたいた。途中まで一緒に行かないか？」

話しかけられたので顔を上げると、そこには先程眼帯のおっさんに怒られていたピンクシルバー髪の男がいた。わざわざ広い講義室の反対まで来て俺に声をかけてきた理

由は何だろうか？

「あんたもマサムネ教官に当てられてただろ？　なんか親近感沸いちやつてさ」

「知り合いと一緒にいかなかったのか？　確かフオーローされてただろ」

「近くに座ってたやつが助けてくれたけど、別に知り合いって訳じゃないからな。あんたと行くのはなんの問題もないぜ」

マサムネとは眼帯のおっさんの事だ。俺は原作を読んでいるときに眼帯と呼んでいたが、実際に上下関係が出来た今ではコイツと同じようにマサムネ教官と呼んだ方がいいのかもしれない。

そして、どうやらコイツは知らないやつにも助けてもらえる人間らしい。助けた人間が優しいのか、コイツが人に好かれやすい雰囲気をしているのかは謎だが。

どちらかと言えば後者な気がする。ハキハキと明るい印象だしな

「そうか。俺は第八更衣室に行くように指定されてるんだけど、そっちは？」

「オレは第六更衣室だ。場所的には……途中までは一緒に行けそうだな。オレはルベール。あんたは？」

拒否する理由もないので端末に書かれた名前をチラッと確認する。

「グライドだ。実際に未開拓領域フイーグルドに出ることになる」

「オレはナビゲーターだ。担当は教官が決めるって話だけど、一緒になれるといいな！」

自己紹介を終え、更衣室へ向かう。初めて歩く施設内だからなのか、集合時間には随分と余裕があるような気がしたが遅刻した場合どんな仕置きが待っているか分からない。学園でもあるが軍隊なのだ。俺は怒られるのが嫌いなので、出来るだけ従順に行きたいと思っっている。

さて。俺がコイツと行動を共にする事を了承した理由は、コイツがナビゲーター、つまりNPCだとわかっていいるからだった。

原作漫画はVRMMOものの癖にプレイヤーとNPCが同じように動き、どちらにも焦点が当てられるというVRMMOものというより普通のSF学園ものなんじゃないかと思える作品であり、NPCにNPCらしきは全く無い。

プレイヤーたちもそれに驚いている描写はなかったので、この世界のリアルはそういう世界なんだろう。

だろうというのは、原作でリアル側の描写が皆無であるためだ。

俺は、このゲームの外側の世界を一切知らない。今の国家元首、西暦、流行りのゲーム。プレイヤーならみんなが知っている筈のものを一切。

なので、俺はプレイヤーとの関わりを出来るだけ減らそうと考えている。チームを組むことはあるだろうが、リアルの話題には一切応じないキャラクターを確立するのだ。

一方で、ルベルは見覚えがあつた顔である通り原作キャラクターだが、NPCである。

普通にコミュニケーションを取っておけばなんの問題もないだろう。プレイヤーとNPCが普段どう交流していたかは不明だが、普通に会話は成立していたしな。

群像劇作品である原作には明確な主人公はいないのだが、強いて言えば、この快活で人当たりのよく、ナビゲーターという役割上色々な所に出てくるルベルは、NPCの癖に主人公格の一人といえそうな所が若干不安ではあるが、有能ナビゲーターのルベルとは顔をあわせておいた方が絶対いいだろう。

何より、こういうさっぱりとした人間は滅多にお目にかかれないので打算抜きでも付き合いは持ちたい。

「F-I-Tの話をしてたけど、グライドはもう扱えるのか？」  
「F-I-T フィットの話をしたけど、グライドはもう扱えるのか？」  
「どうだろうな。N-A-E-N-Gはこの星にしかないからな」

……早速言葉を濁した。プレイヤーたちにはリアルという共通する世界があり、NPCには本国という共通した背景があるのだ。

本国の描写も、リアルほどではないが少なかったので困る。

「だよなー。シミュレーターで体験した事はあるけど、現実でも直ぐに出来るとは思えないぜ」

「F-I-T フィットが出来たようになつた奴から任務と言われたが、どれだけの奴が出来るようになるか……。訓練漬けで食いつぶされるのは嫌だな」

「まあ、あんたらはSC—POWの扱いが特に上手かった500人だろ？ 直ぐに出来るようになるって」

ナビゲーターであるルベルたちは、ナビとしての素質が見込まれたのもあるが、SC—POWのシミュレーターの成績がそこまでよくなかったからナビゲーターであるのだとか。

それでも、兵士500人に比べてナビは100人を大きく下回っている。沢山いたナビゲーター候補から100人にまで絞りこまれたのだから、倍率としてはそこまで変わらないだろう。

ナビが少ない理由は、元々開拓拠点には無人機を使った調査のナビを行っていた人員がいる他、外に出る俺たちも三人一組が基本になるため沢山いても仕方ないのだとか。「ここまでみたいだな。オレはこっちだから。またな！ グライドー！」

「また会ったら声をかけてくれ」

廊下の途中で案内を見てルベルと別れる。それにしても、ルベルは凄いやつだった。作品が作品なら間違いなく主人公なキャラクターだろう。

あれで前線に立たないサポート要員だというのだから驚きだ。

……さて、FITだが、ルベルにはああ言ったが実は出来るんじゃないかと思ってる。

というのも、俺がプレイヤーと同じ訓練兵だからだ。

ゲームとして考えると、最初の任務……フィールドにでる前にひたすら訓練というのは楽しくない。

そもそもMMOのくせに世界全体の時間が普通に経過して、それでストーリーが進んでいくというのは後発のプレイヤーの事を考えるとありえず、普通ならプレイヤー毎に世界の進行度は別であるべきだから、このゲームを一般的なゲームと同じように考えていいのには謎だが。

まあ実在するゲームではなく、原作デスゲーム漫画のために用意された箱庭なんでもんなものだろう。

そうこう考えているうちに第八更衣室へやってきた。レベルと別れて少ししてから、知り合いと話しながら歩いている歩みが遅いやつらに追い付いたからか、講義室を出るのがかなり遅かったにもかかわらず更衣室付近には結構な人がいた。

少し遅ければ大半が訓練施設に行っていて空いていると思っていたが少し見通しが甘かったようだ。

制服姿の奴らが入り、その横からスーツに着替えたやつらがぞろぞろと出てくるのを眺めていると、不意にホルダーにしまった生徒手帳が震えた。

生徒手帳は身分証明や上官からの通達などにも使われる重要端末であり、それを無く



さないように保持するホルダーが制服には用意されているのだ。

ホルダーから生徒手帳を取り出して画面を見ると、何も操作していないというのに画面の上に立体映像が表示された。そこに映るのはメガネをかけたスーツ姿の、クールな印象を受ける少女だった。

『開拓拠点へようこそ！ 皆様の補助を行っているWhispering Ideal

Sageと申します。気軽にWISとお呼びください』

その声は若干機械音感があるものの、スピーカーのせいだと言われれば納得できるほどには人間に近い。抑揚に至っては完全に人間そのもので、紙面からは読み取れなかったそれに驚いた。

『混雑しているため、速やかにタスクを完了できるように説明を致します。準備はよろしいですか？』

「ああ」

『それでは説明を開始します』

バトルスーツはラバースーツでも全身タイツでもなかった

生徒手帳の上に浮かぶウイズの説明によると、更衣室は本当に着替えるための部屋のようだ。着替えながら雑談なんて時間が発生しない、大変効率的な設備が用意されている。

主な機能はロッカーに端末をかざすと、一瞬で着替えが完了するというもの。

制服に着替えるときはもう一度端末をかざして着替える衣装を選択すればいいらしい。

ちなみに、今回着用するのは作戦行動中も使うバトルスーツだ。

実際の作戦行動中はスーツの上から更に色々の装備を身に付けるため印象が変わるのでスーツだけを見る機会はほとんどなかったが、原作で装備が破損した時なんかにはその下にチラツと見えてた気がする。

勝手な印象だが、インナースーツとなるとピッタリとした体のラインが出る服だと思っていたが、更衣室から出てくるやつらを見るに極度に生地が薄いという印象はない。

また、単色のデザインというわけでもなく、部位別に若干色が違ったり、脇腹と背中を通して両手両足を繋ぐような白い線が書かれていたり、胸元や手の甲にはエンブレム的なデザインがあつたりと見た目も悪くなかった。

『上で説明を終了します。ベース内でご不明なことがありましたら是非呼び出してください。囁き補助することが私の楽しみですので』

「また何かあつたら頼む」

説明をを終えたウイズが消える。声をかけろと言われたが、生徒手帳に呼び掛ければ今のようにもう一度ウイズが現れるのだ。

ウイズは *Segment* の名に負けない高性能 AI なのだ。囁きなんて付いていることから対人補助 AI という印象があるが、実際は施設内すべての設備と情報の管理を行う フロンティアベース 開拓拠点の中枢のような存在である。

俺たちのような新米を個別にサポートするくらい負担にすらならないということだ。

「ロッカーは三つだけか」

入り口が空いたので更衣室に入ると、中はそこそこ広い部屋だった。

しかし、設置されている大きな箱があるためスペースとしてはそこまで広くない。

着替えるために体を動かす必要がないからスペースを確保する理由がないのだろうか。

空いているロッカーに生徒手帳をかざすと、一瞬の認証のあとに制服からバトルスーツに衣装が切り替わった。

体をひねって確認してみるが、体に張り付くような不快感はない。全裸とは違うが、それに近い解放感。ピッチリとした服なのに部屋着として利用していたフリーサイズの服よりも快適なのは少し不思議だ。

許されるのなら制服の下にもこれを着ていたいとすら思う。

しばらくバトルスーツの調子を確認していると、手足を繋ぐ白いラインがわずかに光りだした。水色の光は明らかに異質で、更衣室の光源を反射したのではなく、明らかにこれ自体が発光している。

「ウイズ、この光っているのはなんだ」

『SC—POWを循環させることで消耗を少なくするスーツの機能ですね。不具合ではございません』

更衣室から出てきたやつらのスーツは光ってなかった。何か問題があるのではと早速ウイズを呼び出すと、即座にロッカーにあるモニターに現れて解答してくれた。

「どうやらウイズが出てくれるのは生徒手帳の上だけではないらしい。」

「インナーにそんな機能も付いているのか。オンオフはできないのか?」

常に光っているとしたら、制服の下に着るのは難しそうだ。

『SC—POWの制御を行うことで可能となります。制御方法を読み上げることが可能ですが、訓練兵の皆様にはこのあと訓練施設でSC—POWの扱いについての説明がありますので、そちらを優先した方が良いでしょう』

「そうか……ならこのまま訓練施設に行くことにする。問題はないんだよな?」

『スーツの補助によりSC—POWの効果が現在の訓練兵の平均の約1.8倍ほどになり、身体能力が向上しているため反乱分子として拘束される可能性があります、スーツの機能に問題はありません』

「問題ありません!」

光つてると目立ちそうでイヤだなと思っていたら、実害すらあった。

確かに、スーツを着る前よりも更に力が増している感覚がある。非戦闘職員を殴り倒すくらいいけないだろう。

「教官とかに事情を説明してなんとかならないのか?」

『少々お待ちください……。ツルツパ職員を呼び出すことに成功しました。ツルツパ職員の誘導に従って訓練施設へ移動してください』

「助かる。俺はしばらくここで待っていればいいんだよな?」

『問題ありません』

新兵が武器を持って一人で施設を歩いているよりも職員に案内されている方が億倍

いいだろう。理想は武器を預けることだが、スーツを着ていくように言われてる以上それはできないしな。

「待っている間暇だし、もう少し聞いていいか？」

『なんでしよう？』

「更衣室つて結構狭いだろ？ 今はスーツだからいいけど、この上に装備をこちゃこちやつけたらすれ違うことすら難しいんじゃないか？」

キャラクターによつて装備はデザインから配置から様々だったが、最低限統一されていたものに肩と腰か太股辺りにつける装備があつたはずだ。

当然横幅が広がるので、すれ違うのは厳しくなる。

『更衣室は戦闘用の装備を装着することを想定されていません。大規模出撃の際には新設の専用のドッグが利用されるので、更衣室の窮屈さは問題にならないかと』

じゃあ更衣室はなんのためにあるんだと聞いてみると、以前からここで暮らしていた職員のための施設だつたようだ。色々施設があるので、着替えが必要な機会は少なくともいらしい。

……確か、フロンティアスペース開拓拠点は二十年以上前から存在していると考察していた奴がいたはずだ。

当初から訓練兵を派遣して実地で訓練させることで開拓の手とすることが考えられ

ていたとしても、フロンティアアベース開拓拠点の中心部に近い空間に何十年後のための施設を用意している訳がないか。

「君がウイズの言っていたグライド・エフィルくんだね。僕はツルツパ。早速訓練施設に行こうか」

「よろしくおねがいします」

ウイズの解答によつて更衣室への疑問が解消すると、スキンヘッドの青年が現れた。白い歯を光らせて笑うその姿は、禿げコラ被害にあつたイケメンそのものだった。

訓練兵と職員の上下関係がわからないが、とりあえず施設に従事している期間の大小で言えばこつちが格下なので頭を下げる。

別に下の立場には威張り散らすというわけではないが、年が近そうなツルツパ相手だといつゝ気楽に接してしまいそうなので改めて意識し直した形だ。

「ウイズ、色々ありがとう」

『仕事ですの』

ロッカーのモニターに浮かぶウイズに別れを告げて更衣室を出る。ツルツパは俺の行動を感心したように見ていた。

「本国でもA Iの扱いは改善されたのかい？」

「……どうなんでしょう」

本国の話はしないでくれ！ 俺が困っているのに気づいたのか、ツルツパはそれ以上追求することなく話を続けた。

「第三世代に君のような人が良かったよ」

第三世代……俺たち訓練兵とナビゲーターを引くくるめた呼称だろうか？ 第一世代が開拓拠点を作り上げた人たちだとして、第二世代はなんだろう？

まあいい。今後は俺も第三世代という呼称を使わせてもらおう。

「着いたよ。教官たちに話は通ってるし、スーツの機能を発動させたのは君だけじゃないようだ。安心するといい」

訓練施設に到着すると、そこには沢山の第三世代がいた。講義室の時は後ろに座っていた人間も多かっただろうから気にならなかったが、この人数は圧巻だ。しかもその大半がバトルスーツ姿である。

ツルツパがスーツを光らせたのは俺だけではないと言ったので入り口から探してみると、確かに何人かスーツを光らせている奴を発見出来た。俺の光は水色だが、赤や紫、黄色とそれぞれ光の色が違うのはどんなカラクリだろうか。

バトルスーツは原作で注目されたことはなかったし、この訓練エピソードも殆どカットされていた気がするので俺にはわからなかった。

「ありがとうございます」



「仕事だからね。また会おう」

入り口でツルツパと別れて広い訓練施設の端の方で時間を待つ。軍隊としての側面もあるんで、キッチンと整列しているのが当然だと思っていたが、それぞれグループを作ってまばらに散らばっているようなので、これでいいのだろう。

「それでは、SC—POWを実際に扱うための訓練を始める！」

少しすると、五人の教官がやって来てそう告げた。

その中には、講義中に俺とルベルを指したマサムネ教官の姿もあった。というか、マサムネ教官は横に並んだ五人の真ん中に立っていた。

マジで無礼は許されなさそうな立場だな。

## 好みの異性は？

「以上で説明を終了する。このあとは仮組みのチームで纏まって訓練を行え」

SC—POWについての説明が終わった。教官がうまくSC—POWを扱えるようになるのとスーツが発光すると言ったときは、こっちに視線が集まって煩わしかった。

俺以外にも何人か光ってる奴がいるが、人数が人数である。等分されていたとしても五十人以上には見られていたんじゃないだろうか。

生徒手帳が震える。他のやつらも同時に通知があったようで、端末を覗いている奴が結構いたので俺も開いてみると、そこには仮チーム番号と、俺を含めて四人の名前が書かれていた。

それと同時に、訓練施設内に複数の番号が投影される。自分の番号を探して集まれということか。番号は規則正しく並んでいるので、探すのに手間はかからないだろう。

「アリス、シグマ、グライド、レオ、ユート……名前を呼ばれた奴はこっちに来い！」

全部で十人の名前が呼ばれた。俺も入っているので教官のところへ移動すると、集まってきたのは全員がスーツを光らせている奴だった。中には見覚えのある顔もある。

その二人、シグマとユートは原作キャラの中でもかなり強かった奴だ。

他は顔は知らないが、コイツらにこんなところで接点があるとは思わなかった。なんでこのシーンが原作にはなかったのか不思議なくらいだ。

「お前らは他のやつらとは違う方式で訓練してもらおう」

「才能がある俺らだけの特別訓練つすか!？」

マサムネ教官がそう言うとお調子者っぽい奴がそう言った。上官の話の遮るとか度胸あるなお前。

「特別……。確かにそうだな。レオ、こつちに来て背中を向ける」

「了解つす！」

お調子者——レオが呼ばれ、マサムネ教官がその背中に手を当てると、レオが膝から崩れ落ちる。見れば、レオのバトルスーツのラインから光が失われていた。

「SC—POWの流れを阻害した。最初からスーツが機能する才能は結構だが、オンオフが出来なければ宝の持ち腐れだ。お前たちにはSC—POWの流れが阻害された——つまり扱いにくい状況で他のやつらと同じことをやってみよう。再びスーツを光らせれば、フィットFITも扱えるようになるだろう」

その後、SC—POWの流れが阻害されると脱力してレオのように倒れてしまうので、二人ずつ並んで座るように言われる。

俺たちがそれに従うと、五人の教官がそれぞれ二人の背中に手を当てて処置を行っ

た。

それは一瞬で、触られたと思った次の瞬間には体が重くなり、バトルスーツのラインが元の白色に戻った。

「SC—POW出力を調整するのは必須事項だ。未開拓領域ファイナルドにあるNA—ENGは有限。徒に消費していればすぐに活動限界を迎えるぞ」

講義室でルベルが言っていたように、未開拓領域ファイナルドには有害物質が存在し、その影響を受けないようにSC—POWを消費する。

有限のNA—ENGを使ってSC—POWを生み出す以上、スーツのコントロールができなかった——SC—POWを常に消費していた俺たちは他の奴等とほぼ変わらぬ位置にいたのかもしれない。

マサムネ教官が俺達にチームの元へ行くように指示すると、俺たちは重くなった体を引きずって移動を始めた。

13番。ちよつとばかり不吉なチームナンバーの下にやって来たが、そこにはまだ白髪の少女一人しかいなかった。

少女は制服はそのままに、チョーカーとヘアバンドを付けている。その二つには白い線が引かれていて、訓練兵のバトルスーツと似たものであることがわかる。

13番チームのナビゲーターだろう。

「アカリ・ヒナタか？」

「そういうあなたはグライド・エフィール」

生徒手帳に書かれたチームメンバー名からナビゲーターの名前を読み上げると、顔を上げたアカリは俺の名前を当然のように言い当てた。

こちらを向いてから言い終わるまでの流れが洗練されていて、映画の世界に迷い込んだ気分になった。

生徒手帳に書かれたチームメンバーのうち、訓練兵は三人まとめて訓練兵なので、当てずっぽうでは三割でしか当たらない。

だとすれば、俺が教官呼び出されているのを聞いて、そして呼び出された十人の顔を覚えていたということだろう。

そうすれば、13番チームにやって来る知っている顔は「グライド」になる。

ナビゲーターとして必要な技能かはわからないが、情報処理は得意そうだ。

「好みの異性を教えてください！」

「は？」

「人を知るなら好みの異性を知れ。常識ですよ？ 私のタイプは性善説を信じていて、目の前に困っている人が居たらそれが敵対している勢力の人間だとしても手をさしのべる中性的な銀髪のイケメンです。グライドさんは？」

第一印象はキュートな顔立ちとは違ってクールで育ちが良さそうな印象。その直後にはつちやけたことを言われたので、頭が混乱した。

最初の言い回しは格好つけたかっただけで、本性はこっちなんだろうか？

「好みか……」

驚いたものの、俺はアカリの質問に答えることにした。先に言われているというもあるし、アカリがチームとして親睦を深めようとしているのならそれを無下にするのもしのびない。

しかし、俺は外見と性格がある程度良くて、俺のことを好きな女子ならだいたい好きになれる雑食だ。その基準に好みのフィルターが多少かかるとはいえ、これを正直に話したとしてもシラけるだけだろう。

なので、アカリも言った存在するか怪しい理想的な異性を思い浮かべる事にした。

「背が高くて綺麗な長い髪。肉感的というよりはスラツとした体型で、クールで冷たい印象があるものの意外と優しく、人形や小動物が好きだったり幽霊が怖かったりとかギャップが可愛い美女だな」

俺の答えを聞いたアカリは目を見開いて口は半開き。完全にドン引きしてる。まあ、当然だろう。言ってる有り得ないと自分でも思ったし。

「そんな人いるわけ無いだろうって思う気持ちはわからなくないが、でもそれはアカリの

銀髪イケメンだって同じだろ？」

「なっ!? 居ます! 『性善説を信じていて、目の前に困っている人が居たらそれが敵対している勢力の人間だとしても手をさしのべる中性的な銀髪のイケメン』は実在します! ……じゃなくて! 後ろ!」

「後ろ?」

「……(ぐ)めんなさい」

振り向くと、そこには背が高い黒髪ロングのスレンダー美少女がいた。少しばかり耳が赤いが、それでもクールな印象だ。内面はわからないが、まさか実在するとは。

そして、目が合うなり速攻で謝られた。

……謝罪というよりはお断り?

まあいいけどね。理想は理想。存在しないと思っていたからツラツラと言えたわけで、いきなり目の前に出てくるところこっちも困るし。なにより、目の前の黒髪ロングの美少女は訓練兵だし。

あまり仲良くしないという方針は変わらない。とはいえ、いきなり黙ると雰囲気が悪くなってしまうだろうから適当に話は続ける。

流石にここからリアルの話に繋がる事はないだろう。

「……聞いてた?」

「『好みか……』って考え込んだところから」

問いかけると、気まずそうに視線を逸らされながら答えが返ってきた。

全部じゃん！ アカリもチームメイトが来たことに気づいたなら一旦中断させてくれれば良かったのに。

「アカリ・ヒナタです。お名前と好みの異性を教えてください」

俺が送った視線を無視して、アカリが黒髪ロング美少女に突撃した。まさか……続けるのか！ この状況で!?

「エルザ・アインホルン。好みの異性は……わたしよりも強くて背が高い人」

え、どうなってんの現実世界。普通に自分より強い人が好きと言える女子がいる世界観ってヤバくない？

少なくともモンスタールとかが存在する世界じゃ無いはずだけど。エルザが特殊なだけなのか？

……やっぱりプレイヤーとは話が合わなさそうだ。



こんなチームで大丈夫か？

「残念でしたね、グライドさん。でも完全に脈が無い訳じゃないですし、仮チームでの活動中にイイ所見せればワンチャンありますよ！」

エルザに振られた形になる俺をアカリが慰めてきた。

突飛な発言もあるが、アカリは心配りが出来る優しい性格なんだと思う。

アカリの言う通り、一応俺はエルザが異性に求める自分より背が高い人という条件は満たしている。エルザも女性としては背が高いが、俺はそれより十センチ弱、背が高いのだ。

「いや、まあいきなり理想の異性が出てきて付き合えるって方が困惑するから別に慰めないでいいぞ。そもそも、今は恋愛なんてしてる場合じゃないからな」

「確かにその通り」

「そうですかね？ 中性的な銀髪イケメンが出てきたら私は嬉しいですけど」

俺の言葉にエルザは同意した。

「デスゲーム開始直後だしな。何か月か経ったらデスゲーム中でも恋愛はアリかもしれないが。」

ちなみに、俺としては、デスゲームに参加させられたというよりもこの惑星に訓練兵として転生したという考えのほうが強いので、本国からの援助がなくなったことで資材が枯渇する可能性を考えての発言だ。

シテムウインドウみたいなのがゲーム的な要素が薄い原作が悪い。ゲームの中にいるという実感が無いのだ。

今三期生が急いで訓練を受けている理由も、<sup>フィット</sup>FITという最低限の技術を会得したら未開拓領域の探索に駆り出される理由も本国からの援助がなくなったためである。

何も補給できなければ機械は朽ち、服はボロくなってしまうので、金属、その他色々な素材を回収できるエリアを未開拓領域<sup>フレッド</sup>から見つけて、そこを安全地帯にする必要があるのだ。

「やあ、遅くなつてごめんね。僕はアーサー・アルビオン。よろしくね」

最後にやって来た自分をアーサーだと名乗るやつが現れると、雰囲気完全に凍った。

アーサーは中性的な銀髪イケメンだったのである。

こんなことがあり得るのかと俺もとても驚いている。

「あれ、このクラスだよね？ 僕間違えちゃったかな？」

「いや、あつてるぞ。早速で悪いが、好みの異性を教えてもらえるか？」

アカリがフリーズしているので、俺が問いかけた。

「……答えないとダメかな？」

「アカリが相手を知るなら好みの異性を知るのが一番だと言つてな。ちなみに俺は、背が高く髪も長い美人がタイプだと答えた」

困つたような表情のアーサーに先制攻撃を仕掛けると、アーサーは俺とエルザの間で視線を行き来させた。

該当者がすぐそこにいるからその反応も仕方ない。

「わたしは、わたしより背が高く強い人が良い」

「もしかして、二人は付き合ってるの？」

「いや、俺がアカリに好みを話している所をあとからやつて来たエルザにちょうど聞かれてな。その時に振られたばかりだ」

エルザも先制攻撃を仕掛けると、アーサーは俺の方がエルザより背が高いことに気づいたようでそんなことを聞いてきたが、さっさと否定した。

「アカリ・ヒナタです。好みの異性は中性的な銀髪イケメン！ よろしくお願ひします！」

「ごめんね。僕の好みは背が高く筋肉ムキムキの男の人なんだ」

「そ、そんなー」

そうこうしているうちにフリーズから回復したアカリが前言通り直ぐ様モーションをかけたが、あつけなくかわされる。振られた二人と振った二人って、結成直後からのチーム大丈夫か？

「全員揃って自己紹介も終わったし、そろそろ訓練を始めるか」

近くのチームも自己紹介を終えたのかSC—POWの訓練を始めている所がいくつかある。あまり遅れるわけにはいかない。遅れて落ちこぼれだと判定を受ければ、限りある資材の優先順位が下がって食いつぶぐれる可能性があるのだから。

チームに不安はあるが、振られた側、好意を向けている側の俺は気にしていないし、アカリはナビゲーターだ。仮に本チームがこのままだとしても、未開拓領域フイールドでの活動に問題が起こる可能性は低いだろう。

「アカリの装備はどういう装備なんだ？」

自己紹介を終えて三十分程経ち、俺以外の三人がSC—POWのコツを掴みはじめて、バトルスーツやチョーカー等の白いラインを発光させることが出来るようになった所で沈黙を破り、聞いてみた。

アカリの装備はチョーカーとヘアバンド、光つてから気づいたが薄手の手袋の三つだ。

俺たちのスーツは線が全身を一周することでSC—POWを効率的に循環させ、消耗を少なくするというものであるというのはウィズから聞いているが、それぞれが独立しているアカリの——ナビゲーターの装備はどういうものなのだろうか。

「まだできてないのに話してて良いんですか？」

「まあ、教官も話しながら、体を動かしながら出来るようになれって言っただけ問題ないんじゃないか？」

俺も無駄に三十分過ごしていた訳じゃない。教官にSC—POWの流れを阻害される前との落差からSC—POWの存在は感じとっている。あとは教官にやられたのをどうにか解除するだけなのだ。

「そうですか。私の装備はSC—POWによる思考能力や身体能力の強化幅を増やして少量で求める効果を得るといいます。皆さんが着ているスーツはどういう効果なんでしょうか？」

「俺たちのはSC—POWを循環させる事でSC—POWの消耗を少なくする効果があるらしい」

「グライド君はどこでそれを知ったの？」

SC—POWに集中していたアーサーが話に参加してきた。あ、スーツの光が消えた。

アカリは話しながらも維持していたが、全身に効果があるスーツはその分難しいのかもしれない。

「スーツに着替えた後、勝手に光り出したからスーツの不具合かどうかウイズに聞いたんだよ」

「ウイズ？」

今度はエルザだった。言葉が短かったからか、一瞬ラインの光が暗くなる程度にとどまっている。

「更衣室前でAIに説明を受けなかったか？」

俺が聞き返すと、三人は「ああ」と言った感じで頷いた。どうやらウイズの知名度は低いらしい。

アカリはAIの扱いが悪いという本国出身のNPCだからわからなくないとしても、アーサーとエルザは何故だ？ AIに対するスタンスはアカリとそこまで変わらないように見える。

やはり不明な現実世界側の問題だろうか？

俺的にはAIでも自立思考ができて意思疎通が出来る存在なら人と変わらないと思うんだが。

と、そうだ。ウイズだ！ 教官が俺たちに施した処置について知ればそれを乗り越え

る近道になるかもしれない。

既にSC—POW操作の取っ掛かりは掴んでいるのだ。あとは流れが阻害されるためにうまく扱えないのをどうにかするだけだ。

「ウイズ。他人のSC—POWの流れを阻害する技術について教えてくれ」

『かしこまりました。資料の読み上げを開始します』

ウイズが読み上げたものによると、どうやら他人のSC—POWの流れを阻害するのに使われるのは雷属性のSC—POWのようだ。

ということは、今日来ている教官五人は全員<sup>ファイット</sup>FITでいうThunder、雷属性と  
いうことか。

<sup>ファイット</sup>FITの割合が等しいとして、教官は五人の三倍で十五人。勿論もつといる可能性はあるが、そんなにいるなら訓練兵を急いで育てる必要もないし、その程度しかないのではないだろうか。

話が逸れたが、俺の体に残留した教官の雷属性SC—POWが悪さをしていて、それを取り除くにはSC—POWで押し流す必要がある。

しかし、<sup>ファイット</sup>FITを行わない無属性のSC—POWでは属性変化したSC—POWに干渉することは難しいため、俺が自力で解除するなら<sup>ファイット</sup>FITによる属性変化を行うのが一番早いらしい。

……確かに、教官は「阻害された流れを正常化出来ればF I Tも扱えるようになる」と言っていたが、「F I Tを扱えるようにならないと正常化出来ない」の間違いじゃないか！

「ウイズ、F I Tについても教えてくれ」

『かしこまりました』

流れが阻害されているだけで、S C—P O Wへの理解レベルとしては俺もエルザやアーサーとそこまで変わらないはずだ。そう信じて、F I Tに取り組むことにした。

チームで一人だけ落ちこぼれとか流石に嫌だぞ。

というか、全体解説ではF I Tの前段階、スーツのラインに光を灯すための方法しか解説してなかった気がする。

もしかして、俺たちスーツピカピカ組ってしばらく放置されるはずだった？



## VR訓練は人が死なない施設です

「なるほどね」

ウイズによるFIGHTフイットの説明が終わってから二十分。今までの停滞がなんだったのかと思うほどの早さで俺はSC-POWとFIGHTフイットを扱えるようになっていた。

最初からウイズにFIGHTフイットについて聞いていれば、三十分もかからずに教官の雷属性のSC-POWを取り除けたのではないだろうか？

「ウイズを頼ったのか」

「マサムネ教官……。不味かったですか？」

「いや、ウイズが教えたのならば問題ない。単純に驚いただけだ」

扱えるようになったSC-POWを試していると、眼帯——マサムネ教官が音もなく現れた。

マサムネ教官もツルツパ同様に第三世代がウイズを積極的に頼るとは思っていないか？

とはいえ、実際に頼ってQ&AとP;Aを行ったのは俺だけで、アーサーとエルザは俺がウイズに聞いている内容を近くで聞いていただけなのだ。

それでも二人は直接聞いていた俺よりも早くF I Tを習得したのだが。

「十三班は合格だな。個人でF I Tを済ます奴は何人かいたが、チームで揃って済ませる所が出てくるとはな。本来ならば個人単位で合格を言い渡し、F I Tに照らし合わせて合格者で新たにチームを組むのだが……」

マサムネ教官は俺たちのスーツの色を確認して言葉を続けた。

「これも運命か……。バランス良く振り分けられているようだな。お前たちは暫く十三班として活動するといい」

本来、段階を越えてF I Tを習得できた者たちは仮組みのチームを抜けてF I Tを習得できた者同士で新しく組ませるらしく、既に相方を待っている者も何人かいるらしいが、俺たち十三班はF I Tの三属性が揃っていた。

火のエルザ、氷の俺、雷のアーサーである。

そのため、ここをバラバラにする必要はなくそのまま次のステップに進ませることをマサムネ教官は決めたようだった。

「ウイズ、十三班を計測室に案内しろ。そのあとはお前の裁量で進めていい」

『了解しました。十三班の皆様はこちらへ』

マサムネ教官がウイズを呼んでポケットから何かを取り出すと、それは空中に浮遊してその上面にウイズを投影した。ウイズは自由にそれを動かせるようで、着いてくるよ

うに俺たちに言くと、こっちを向いたまま計測室とやらに移動し始めた。

「グライド、お前は十人の中で一番早くSC—POWを扱えるようになった。期待しているぞ」

「ぐう……！ 頑張ります」

マサムネ教官が発破をいれるように俺の背中を叩くと、背中だけではなく全身に痺れが広がった。

全身から力が抜けるような感覚を受けるが、SC—POWの流れを意識する事で崩れ落ちそうになるのをなんとか堪えて返事をした。SC—POWにはSC—POWで抵抗する。学んだばかりのことだ。

「反応は悪くない。体を動かせなくなるというのは致命的だ。常にSC—POWで対抗できるように意識しておけ」

「……ありがとうございます」

今のビリビリは特に意味はなかったってことか？ ただ試しただけ？

……やはり現代の教育とは違う。一回痛い目に合わせるスパルタ方式だ。今後も気を抜かないようにしましょう。

俺みたいな平和ボケした人間だと注意しすぎて丁度いいくらいだろうしな。

「グライドさーん！」

「失礼します」

「……残りカスが無かったとはいえ、他がそうであるとは限らない。一人が解除できたのなら残りも早めに回るべきか」

ウイズに着いていったアカリに呼ばれたのでマサムネ教官に礼をして立ち去る。なんか言つてた気がするけど俺に対しての言葉じゃないっぽいし大丈夫だろう。

俺じゃなくてシグマやユートたち、教官のところ集まった他のメンバーの話だろうか。

「遅いですよ」

「悪い。マサムネ教官と話してたんだ」

「なにを話したの？」

「なんかビリビリつてされて、体が動かなくなるのはヤバいからSC—POWで常に対抗できるようにしろつて」

「グライド君は期待されてるのかもね。僕も負けないように頑張らないといけないな」  
アカリとエルザの質問に答えると、アーサーが勝手に気合を入れ始めた。

エルザもそうだが、この状況に結構前向きようだ。訓練兵の中には現実を受け止められずに気力がないやつもいるだろうに。

「ウイズ、案内を頼む」

『かしこまりました』

待つていてくれたウイズにそう言って、俺たちは計測室とやらに向かった。

俺以外誰もウイズに声をかけないってヤバくないか？

フロントイアース  
開拓拠点内ならめっちゃ頼りになるAIだぞ。

計測室にやって来た俺たちは、一人ずつ円形の台に立たされ、あらゆる方向から変な光を当てられた。その結果、あらゆるデータが解析された俺たちは、俺たちのまま電脳世界へと立つことになった。

エルザやアーサーからすればVRMMOのなかでVR空間に入ったことになる。

「本国のはSC—POWの再現がなんとかって話だが、これで訓練になるのか？」

ルベルがそんなことを言っていた気がするので、ウイズに聞いてみた。現実世界に肉体を持たないウイズだが、電脳世界では話が別なのか俺たちと同じように電脳世界の地に立っている。

モニターやホログラムに映っていた時は物理的に小さく、身長もあまり高くないような印象があったウイズだが、こうして対面すると思っていたより背が高く、優秀な秘書染みた雰囲気がある。

身長はエルザと俺の中間ほどだろうか？

『問題ありません。VR訓練の有用性はマサムネ教官他職員たちにも認められています』

「本国のシミュレーターでもNA—ENGGやSC—POWの完全な再現はできなかつたはずですよ！」

『NACURE—ENERGY及びSCICHIK—POWERの定義はわたくしが行いました。実際のものとは消費・変換の方式が異なりますが、使用感としては現実のものと同じになるように調整しております』

アカリは本国を基準に考えたらしい。まあ無理もないか。アカリからすれば本国は都会で、開拓拠点は田舎どころか離島の限界集落みたいな認識なんだろうし。

開拓拠点にあるものの方がハイスペックつてのが考えにくいのかもかもしれない。

そして久しぶりに聞いたな、NA—ENGGとSC—POWの正式名称。

NACUREは自然を意味するNATUREと、キラキラした、虹色のものを意味するNACREOUSを合わせた造語で、SCICHIKは分かりやすくサイエンスとサイキックを合わせた造語である。

自然界にあるキラキラしたエネルギーと、科学的な手段で補助を行って始めてマトモな出力に出来る超能力の源であるので、結構分かりやすいんじゃないだろうか。

「教官たちが使っているなら問題ない」

「ここで試してみた感じ、現実でSC—POWを使ってるのと違いがわからないしね。原理はどうでもいいかな」

エルザとアーサーはそれぞれ火と雷を使ってみて、特に問題ないと判断したようでもうでも良さそうな感じだ。

「どうやらVRシミュレーターの詳細について興味はないようだ。」

「VR訓練が有用なのはわかったが、俺たちは何をすればいいんだ？」

『実際の任務をなぞったミツシヨンを受けたつ、武器の選択を行っていただきます』

「武器？ SC—POWだけで戦うんじゃないんだ」

未開拓領域にはTファイ Sールドという原生生物がいる。こいつを倒すのに手っ取り早いのは

SC—POWを使うことだが、SC—POWを使えば未開拓領域での活動時間が減ってしまう。

そのため、消耗を最低限に抑えながら戦闘をこなすために武器は必要なのだ。

NA—ENGを空気中の魔力、SC—POWをMPと考えると分かりやすいありふれた世界観になるが、ゲームチックに考えるのならNA—ENGは制限時間を延長するアイテム、SC—POWは制限時間で、制限時間を消費することで技を繰り出すシステムであると考えればそれが大体正しいことになる。

ウィズがそんな感じに武器の必要性を説明すると、辺りに素振り用のカカシと大量の

武器が現れた。

『暫定的な武器を選択してください。実際の任務では携行する必要があることもお忘れなく』

ウイズの言葉で、自分の身長の上三倍以上もありそうな槍に興味を持っていたエルザが手を引つ込めた。仮にそれを扱う技量があったとしても、木々が生い茂るエリアなんかもある未開拓領域ドで持ち運ぶのは不可能だろう。

『訓練が始まってからも武器の変更は受け付けますので、気楽に選んでしまっても問題はございません』

武器の海を前に悩んでいると、ウイズが話しかけてきた。実際の任務じゃ選んだ武器を変えることなんて出来ないが、これはVR訓練。あまり考えずにやってみるか。

実際に未開拓領域ドに出たり、TサーマルシューカーSと戦ってみて気づくこともあるだろう。

エルザとアースァーが思ったより早く武器を選んだので、判断の基準にしやすいだらう片手剣をとりあえず使ってみることにした。



## in to the VR

「ここが未開拓領域……。仮想の舞台なのにプレッシャーを感じる」

「SC—POWが削られていく。アカリ、どっちにいけばいいの?」

『目標地点は北西十五キロメートル地点です。真つ直ぐ行くと途中で大地の割れ目に突き当たるので、まずは北に進んでください』

俺たちはウイズが構築したVR世界の未開拓領域に立っていた。

アーサーの言う通り、データではないはずの偽物の未開拓領域は、ゆっくりと俺たちのことを溶かす酸に浸かっているかのような焦燥感を俺たちに与えてくる。

エルザが俺たちのナビゲーターであるアカリに指示を仰ぐと、アカリは特に緊張した様子もなく答えた。

「先頭は僕が行くよ。といっても、暫くは平原みたいだから隊列は関係無いかもしれないけどね」

アーサーを先頭に北を目指して歩いていく。

未開拓領域に存在する有害物質を弾くためにSC—POWを活性化させているからか、徒歩の感覚で歩いているにも関わらずぐんぐんと距離が稼がれる。

十五キロ先が目的地と聞いたときは遠いと思ったが、実際はそうでもなさそうだ。

そもそも、開拓を行うためにはもつと広い範囲の探索が必要になる。十五キロなんて子供のお使いレベルかもしれない。

『アーサーくん、ストップ。グライドさんはフラッグを立ててください』

「了解。結構重いから序盤で減らせてよかつたよ」

アカリの指示で地面に機械を突き刺す。フラッグは直径三十センチ、長さ五十センチほどの筒状の物体で、俺は今までこれを背負って歩いてきた。バトルスーツだけではなく、SC—POWの効果を増幅・拡張する様々な装備を身に付けた上でなお重いと感じるので、実際はかなりの重さなのだろう。

地面に刺さったフラッグが起動すると、フラッグを中心に特殊な生地で作られた小さなテントが現れた。このテントは原生生物であるTサーマルシーカーSからフラッグを守るためのものだ。

『フラッグ、正常に機能しています。周囲の地形情報の収集が終わるまで待機してください』

テントの中でフラッグが地形や地層などを調べていく。俺たちの役目は基本的に色々な場所にフラッグを立てて地形を調べることである。

また、フロンティアベース開拓拠点を中心としてフラッグを増やしていくことでNA—ENGが溜まっ

ている場所を効率的に発見することが出来るようになり、より遠い場所まで探索できるよようになる。

フラッグはとても大事なものだ。

『フラッグが南東にTサーマルシューカー Sの反応を検知しました。近いです。目視できますか？』

俺たちのナビをするアカリだが、景色の共有は行われていない。俺たちの装備のひとつに、機能を縮小して小型化したフラッグのようなものがあり、そこから送られる情報をもとにアカリは俺たちに指示するのだ。

当然、本物のフラッグの範囲内ならば情報の精度は高くなり、指示はより具体的かつ正確なものになる。

「何もいないみたいだけど」

『……Tサーマルシューカー S 反応、遠ざかっていきます。早いです！ 反応、ロストしました』

アーサーが双眼鏡片手に南東を探すと、アカリが情報を更新した。どうやらすごい速度でフラッグ範囲内から消えたらしい。

「そんなに早く動いたら砂煙のひとつでも上げそうなものだけだ」

「雲の上かも」

地面を見ていた俺とは逆に、空を見上げるエルザの視線の先には分厚い雲があった。確かに、雲の向こう側にいたとすれば黙視は不可能だ。

『フラッグによる探査が完了しました。西側にNA—ENG溜まりが複数あるみたいですね』

「回収しに行くか？」

俺たちのSC—POW残量はまだ七割近くある。だが、回収出来るときに回収した方がいいのかもしれない。

「戦闘になったとき、どれくらいかのSC—POWを使うのか僕たちにはわからない。出来るだけ貯めておいた方がいいと思う」

「西に行っても道は平気？」

『割れ目は斜めに存在しているので、西に行った場合はそのまま北上することはできません。少し東に戻る必要があります』

「そつちにフラッグの設置ポイントはあるのか？」

『いえ、フラッグの範囲は割れ目まで届いているので、設置ポイントはないです』

本当なら、この判断はナビゲーターであるアカリが行うものだ。しかし、アカリは実際にナビゲーターとして動くのは初めて。

すべてを丸投げするのはチームとして無責任だし、俺たちがどのような判断をするのかというのもナビゲーターには重要な情報だと思う。

「北にはNA—ENG溜まりはないのか？」

『あつ、フラッグ範囲内ギリギリにひとつだけあります』

フラッグ範囲は狭くはないが、広大な未開拓領域フィールドと俺たちの移動速度を考えるとそこまで広くもない。西へいく往復の手間を考えたら、北でNA—ENGを回収したあと、範囲外でも見つけるのがいんじゃないだろうか。

「平原だし、TサーマルシーカーSはこつちが先に見つけられるだろうから戦闘はあまり考えなくていいかもな。このまま北に行こう。アカリはNA—ENG溜まりの搜索をよろしく」

「SC—POWが五割を切ったか……。西にいかなかったのは判断ミスだったかもしれない。すまん」

「NA—ENG溜まりから回収できるSC—POWの量が思ったより少なかったのが原因だし、気にしないで」

「三人だから仕方ない」

北へ進み、二つ目のフラッグ設置を済ませて待機しながら判断ミスを謝った。NA—ENG溜まりでSC—POWが思ったより回復できなかったのが原因だ。

一人で行動しているなら十分な量だったかもしれないが、三人一組で行動すると消費量は三倍、回復量は1/3である。NA—ENG溜まりの規模にもよるのかもしれないが、ひとつでは賄いきれないわけだ。

「それにしても、敵が出てこないね。現実もこんな感じなのかな？」  
 「もつとたくさん出てくると思ってた」

アーサーの言う通り、俺たちはまだ一度もT Sに遭遇していなかった。それどころか、サーマルシーカー T S 反応があつたのも雲の上を移動していたと思われるサーマルシーカー T S 一匹だけだ。

俺も原作の戦闘シーンからしてもつと出てくると思っていたので拍子抜けだ。ただ、よく思い出してみれば原作では大体何らかの事件があつた。なので、何も無い平時ならばこんなものなのかもしれない。

『うーん……』

「どうかしたかい？」

『N A — E N G溜まりを発見したんですけど、その近くにサーマルシーカー T S 反応が複数あるんです』

サーマルシーカー T Sとの戦闘はS C — P O Wの消耗と怪我のリスクがある。できるだけ避けるべきなんだろうが、N A — E N G溜まりの存在も無視できなかつた。

「初戦が複数つてことになるけど、僕は行った方がいいと思う。消耗が三倍というなら殲滅速度も三倍だよ」

「じり貧になって退却はイヤ」

「そうだな。消極的な選択ばかりというのも良くないか。アカリ、N A — E N G溜まり

の規模はどんなもんだ？」

『さっきのNA—ENG溜まりから得られたSC—POWから考えると、ほぼ全快出来ると思います』

「やるしかねえか……」

「各々自分の武器を確かめる感覚でいいのかな？ あとで回復できるとはいえ、SC—POWの消耗は避けるべきだし、訓練の趣旨からしてもSC—POWでゴリ押しするのは違うしね」

ああそうか。SC—POWを回復できるなら使えるだけ使って楽に倒してしまえばいいと思っていたが、それも避けた方がいいのか。

片手剣……。とりあえず選んでみたが、俺に武器が扱えるんだろうか？ 武道なんてまともにやったことないぞ。

「楽しみ……」

俺の不安をよそに、エルザは自分の武器であるショートスピアを手に好戦的な笑みを浮かべていた。やっぱり何か世界観がおかしい気がする。

VRMMOが一般的になった世界だとこれが普通なのか？